

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしは、持病のぜんそくのため、学校行事を欠席することが多い。去年の運動会は応援ダンスを頑張っていたが、前日に発作を起こし欠席してしまい、クラスの中心的存在であるミッチーが代わりにおどった。落ち込むわたしだったが、同じクラスで近所に住む光樹くんが応援団のボンポンを届けてくれたことで慰められた。

バレンタインデーが終わると、日差しがふんわりと明るくなってきた。芽はまったく出てないけど、空地の土の下でも、なにかが準備されているのがわかる。五年生もあと少しで終わりで、三学期の最後の週には、英語劇の発表をやることになった。全員に役がつくようなお話がいいということになって、一組は『ノアの箱船』というお話をやることになった。セリフの多いノアやその家族はやりたい人が多くて抽選になったけど、あとは好きな動物になって、セリフも自由に考えてよくて、先生が英語に訳してくれたのを暗記するだけだった。わたしは他の人とかぶらないような動物にしようと思って「カピバラ」にした。何の動物をやるか、決まった人から手をあげて申告していったけれど、最後まで手をあげない人がいた。

「何もやりたくありません」

光樹くんはそう言って黙りこみ、久しぶりにみんなを困らせた。サンショウウオやタヌキにされてきた光樹くんは、ぜったいに動物になんかなりたくなかったのだろう。またそれをきっかけにいじめられる可能性だってある。でも二宮先生は、全員が参加しなきゃいけないと言って、彼にピューマとかコンドルとか、カッコイイ動物を提案して、人間の役を作ってもいいと言ったけれど、「何もやりたくない」という彼の気持ちは変わらなかった。教室は最後には A 静かになった。

沈黙をやぶって、男子の一人が言った。

「大島くんは、箱船を作ってくれば、いいんじゃない？」

寸劇だから、簡単な衣装を作るだけで大きなセットまでは作らない、と先生は最初に話していたけれど、

「あっ、それはやる！ それならやる！」

光樹くんは身をのりだして大きな声で返した。先生はちょっと考えていたけれど、それでいくか、と言って、彼が箱船のセットを作ることが決まった。提案した男子は、光樹くんに「しょーお」とあだなをつけた男子だった。光樹くんが悪いことをしたと思っていたのか、光樹くんといえば船と思っただけなのかはわからないけど、まさに「I」だとわたしは思った。

光樹くんが二週間かけて段ボールで作った船は、絵本に出てくるノアの箱船とはまったく違って、かなり独特だった。みんなも予想はしていたけど、ここまでとは思ってなかったから、誰も、良いとか悪いとか、言うこともできなかった。二宮先生だけがごく褒めていた。先生は光樹くんに聞いていた。

「どうして、こういう形にしようと思ったの？」

「中の生き物が生き残るためには、洪水に耐えられる形じゃなきゃいけないくて、卵は一番壊れにくい形にできてる、と聞いたからです。あと、洪水が終わって船が見つかったときに、中に何が入ってるかわかってもらわなきゃいけないから、中にいる動物の名前を全部英語で書きました。でも昔だから、英語じゃないかもしれないって後から思って、古代語みたいなのも考えて、書きまくりました」

卵の形の船は、目立つように七色で、その上に英語と絵文字が柄のように書かれて、すきまなくうめつくされていた。丸みを出すために、段ボールにもとても上手にカーブがつけてある。

「これが船って、すごいなあ。遠い未来の船みたいにも見えるね」

二宮先生は感心して、わたしも同じように思った。そして、光樹くんが作るヘンテコな作品はみんな、同じように彼なりの考えがあって、その形になっているんじゃないかと、初めて気づいた。

英語劇の本番の日、講堂で一組から順に劇を発表をした。他のクラスはセットを作らなかったから、光樹くんのセットの前でお芝居が始まると、あれはなんだ？ と大騒ぎになったらしい。観に来ていた父兄や中等部の先生も、不思議な箱船に驚いたようで、口をそろえて褒めたそうだ。その場にいらなくて残念だった。そう、

①「カピバラ」は、ぜんそくになっちゃって、箱船には乗れなかった。ごめんねカピバラ、生き残れなかったよ……。

「佐野さん」のまま、わたしは六年生になって、光樹くんを「タヌキ」と呼ぶ人もいなくなった。誰もが自分のことで忙しそうだった。中等部に進まないで他の中学を受験する人も多く、スポーツクラブや劇団に入ってる子たちも、授業が終わると急いで帰っていく。でもわたしは、できるだけ休まないで学校に行くことだけで、せいっぱい。つまり何も変わらない毎日だった。

ぽっかりと空が見えるお気に入りの空地にも、青々とした雑草がまた生えてきた。けれどそれはすぐに刈られてしまい、わたしがまた具合が悪くて学校を休んでいるうちに、灰色のコンクリートの土台がそこにできた。それからあっという間で、白い小さな家が二軒建って、空はすっかり見えなくなってしまった。わたしががっかりしていることなど知らない人たちが、週末になると家を見に来ていたけれど、しばらくして「売出し中」の看板がはずされたので、二軒とも売れたみたいだった。夏の終わりには、小さな車や、子供用の椅子が付いた自転車が家の前に置かれて、どの窓にもカーテンが付いた。その前に立って目をつぶれば、まだ空地が見えるのに、もう誰かがそこでふつうに暮らしているのが、不思議だった。

夏休みが終わった学校では、じきに運動会の練習が始まった。

「体調悪いので、見学していいですか？」

何度か体育の先生にそう言って、わたしは元気で授業を二回に一度は見学にした。具合が悪くなる夜は、いらいらしてご飯やお菓子を食べ過ぎることもわかってきて、そういうときは、あまり食べないで早く寝るようにもした。ママは「自己管理ができていい」とわたしを褒めた。褒められたからって、べつに嬉しくもないけれど。

「その調子で気をつけて過ごさない。最後の運動会がもうすぐだもんね」

「うん。もし出れたら、最初で、最後の運動会だね」

去年よりがんばってないぶん、どこか冷めているわたしがいた。

そして、明日は運動会！ という日が今年も来た。リハーサルでは、低学年の誘導^{ゆうどう}をしたり、当日はタイムの記録や音響^{おんきやう}もまかされるから、六年生は先生と同じぐらいに準備で忙しかった。さすがにその日は、お稽古^{けいこ}だからと先に帰る人もいなくて、「最後だから、思い出になる運動会にしようね！」と盛りあがって、みんな遅くまで残っていた。光樹くんも、応援幕にアニメのキャラクターを描いて、最後まで色を塗^ぬっていた。

「ああいうの描くのも上手なんだね」

久しぶりに帰り道が一緒になったので、バスの中でわたしは光樹くんに話しかけた。

「あんなのは簡単だよ。写すだけだから」

彼は返したけど、そっけない口調だった。わたしもそれ以上は話しかけなかった。わたしたちが降りるバス停が近づいてきて、光樹くんがブザーを押した。降りるとすっかり暗くなっている、バイバイも言わないで、自分の家へと歩き出した光樹くんを、わたしは呼び止めた。

「光樹くん！」

彼はびっくりしたようにふりむいた。

「あのさ、今さらだけど、去年はボンポンを届けてくれて、ありがとう」

なんのことかわかってないようだった。

②「去年の運動会の日に、応援ダンスで使った白のボンボン、届けてくれたよね」

ああ、と光樹くんは思い出したみたいだ。笑っているような困っているようなゆがんだ表情なのが暗くてもわかった。一年前の自分がやったことを恥^はずかしく思ったのかもしれない。あのあといろいろあって彼も「オトナ」になったから、思い出したくないのかなと思った。すると、彼は言った。

「さわって、みたかったんだ」

えっ？とわたしは聞き返した。

「あの、フワフワにさ。実は、おれも作ってみたかったんだ。クシで細かく裂^きいてくのとか見てて、面白そうで」

「……あ、そう」

「どうなってるかわかったから、家で作ってみたよ。うまくできたし。言うなよ、人に」

光樹くんは真面目な顔をしていた。わたしは、うん、とうなずいた。まさか、彼がボンボンを作ったなんて……わたしの想像をはるかに超^こえていた。そして光樹くんは B わたしを見て、つぶやいた。

「……あいつにやるのも、もったいないし」

わたしは彼を見つめた。さわってみたかったし、ミッチーにあげたくもなかった。どちらもウソではないだろう。

「じゃ、明日」

と、光樹君は手をあげた。

「うん、明日」

③「明日は、オレなんも届けないから。クロネコヤマトじゃないから」

光樹くんは背を向けて行ってしまった。

「だいじょうぶ。明日は出るから、運動会に」

聞こえないと思うけど、わたしは小さく返した。

その夜は、疲れたのか、 C 眠れた。

そしてついに、生まれて初めて、六年生で！ わたしは運動会に出た！ ハードル走では、遅いグループではあったけれど、前を走ってた人がコケて、わたしは一位になってしまった。パパとママは、わたしよりも嬉^{うれ}しそうだった。だって二人とも生まれて初めて、子供の運動会の応援に来れたのだから。でも、わたしの率直な感想は、観客が多いだけでリハーサルとあまり変わらない、だった。ただ「運動会の本番だ」と、誰もが思っているだけ。それが違いのような気がした。足が速い高田くんは、ほとんどの競技で一位になって、そのたびに女子がさわいで、足の悪い三井くんは、体操服は着ていたけれど先生と一緒にテントの下でほとんど見学していて、光樹くんは、かったるそうに一番最後にゴールラインをまたいでいた。

ふだん学校ではしっかりしてる子が、お父さんやお母さんと一緒にいると違^{ちが}って見えるのもおもしろかった。高田くんのお母さんは、お姉さんみたいに若くて美人で驚いたけど、高田くんが「ママ、ママっ！ 早く来てっ」と、お母さんのことを呼ぶのを見ちゃったら、もう次のバレンタインデーで悩^{なや}むことはないと思った。

II

それがわかった。出てみないと、それもわからないから、やはり出れてよかった。終わって、グラウンドに出した椅子や机をみんなと一緒に教室に戻しながら、そう思った。

中島たい子『がっかり行進曲』より（一部、改変があります。）

* ノアの箱舟……ノアとその家族、多くの動物たちを乗せた船だけが、地上をおそった大洪水を生き延びたという『旧約聖書』中の神話。

問一 A C に最も適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ぼんやりと イ チラッと ウ しんと エ ぐっすり オ そっと

問二 部a「そっけない」b「率直な」の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 冷たく愛想がない様子
イ 真面目で静かである様子
ウ 恥ずかしそうに口ごもった様子
エ 不安をかくすように強がっている様子

ア みんなと共通していてありふれていること
イ 人前で言っているはいけない秘密であること
ウ 飾り気がなくありのままであること
エ すぐに思いつきわかりやすいこと

問三 I に適する、「困った人に力を貸すこと」という意味の「船」を使った言葉を、ひらがな五字で答えなさい。

II

に最も適する文を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 最後の運動会はやはり盛り上がった。

イ 親のためにも運動会は出るべきだ。

ウ 運動会では普段よりもみんなとかかわれる。

エ 運動会も出たら出たで、いろいろある。

問五 部①「カピバラ」は、ぜんそくになっちゃって、箱船には乗れなかった。ごめんねカピバラ、生き残れなかったよ……。とありますが、これはどのようなことを表していますか。「カピバラ」が何を示しているかを明らかにして説明しなさい。

問六 部②「去年の運動会の日」に、応援ダンスで使った白のポンポン、届けてくれたよねとありますが、光樹くんがポンポンを届けてくれた理由を二つ答えなさい。

問七 部③「明日は、オレなんも届けないから。クロネコヤマトじゃないから」とありますが、この時の光樹くんはどのような気持ちだったのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんの家では新聞を取っていますか？ 取っていない家庭が多いと思います。今はインターネットが普及しているので、わざわざ新聞を取らなくても、ネットで無料の情報が好きなだけ検索できるようになっています。

「新聞なんて、必要なの？」そんな声も聞こえてきそうですね。でも新聞はやはり必要だと私は思います。ネットにメリットがあるように、新聞にもメリットがあるんです。

そのメリットは何かというと、ひとつにはネットの画面で見ると、紙に印刷された文字で読むほうが記憶が定着することです。

ネットの情報はどうしても画面をサーッと流してしまいがちです。感覚的に文字が頭にひっかからないので、記憶にあまり残らない。サーッと読めてしまうのが、ネットの良いところでもあるのですが、記憶に定着するかどうかで見たら、紙に印刷されたもののほうが、圧倒的に有効なのではないでしょうか。

なぜかというと、紙に印刷されたものは、文章が書いてあった場所や形を記憶にとどめやすいからです。

みなさんも新聞の紙面を思いだしてみてください。見出しの位置や大きさがみな違いますし、記事が縦長だったり、横長だったり、レイアウトがいろいろですね。みな違うので、記憶にひっかかるフックがたくさんあるのです。

教科書もそうですね。私は世界史や日本史を勉強するとき、「あの話は教科書の右上に書いてあった」「あの項目は左すみにあった」など、場所や位置で記憶していました。

でももしこれらの事項がバラバラにタブレットの画面に出てきたら、ものすごく記憶しづらかったと思います。ネットの場合、全部が横書きの同じパターンで出てくるので、メリハリがなく、記憶に残りにくいのです。

たとえば、新聞の面は住宅地で、そこに掲載されている記事は家のようなものです。新聞の場合はいろいろな形の家がさまざまなレイアウトで存在しているので、和風テイストのあの家とか、赤い屋根の洋館のあの家などと、ひとつひとつが記憶しやすい。

一方、ネットの記事は整理されているので、同じ形の家がずっと続いていくような感じです。つまり人工的な街なみなので、どの家をとっても記憶しづらいのです。

新聞のほうがいちいち記事や、航空図のように一覧できる良さがあります。

この「一覧性」が新聞のメリットです。ぱっと開いたときに全体を見通しやすいので、ざっと見出しを見て、その中でセレクトして記事を読むことができます。ネットは順番に流れていくことしかできませんから、新聞のような一覧性はないわけです。

③ もちろんネットにも良い点はあります。記事を検索することにかけてはネットの I に出るものはありません。過去の記事の検索はネットなら一発できます。関連する記事をまとめて読むこともできます。

これが新聞だと、図書館まで行って、いちいち他の新聞を調べたり、過去の縮刷版^{*}を広げなければいけません。その手間たるや、考えただけで気が遠くなります。ネットがない時代は、一日中、図書館にこもってそんなこともしていたわけです。

そう考えるとネットの便利さははかりしれません。でもだからといって、ネットだけで事足りるわけではないと私は思います。

印刷された新聞ならではの良さがある。それを忘れてはいけないと思います。

齋藤 孝『新聞力 できる人はこう読んでいる』より（一部、改変があります。）

* メリット……利点。

* 縮刷版……新聞などの印刷物を、元の大きさから縮小して印刷したもの。

問一 部①「新聞にもメリットがあるんです」とありますが、それはどのようなことですか。二つ説明しなさい。

問二 部②「私は世界史や日本史を勉強するとき、『あの話は教科書の右上に書いてあった』『あの項目は左すみにあった』など、場所や位置で記憶していました」とありますが、なぜ、そのようなことが可能になるのですか。解答らんに続くよう、十八字で抜き出しなさい。

問三 部a「しまいがちです」b「はかりしれません」の説明としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

a 「しまいがちです」		b 「はかりしれません」	
ア	しないことが多い。	ア	はかりきれないほど大きい。
イ	することが多い。	イ	はかっても理解できない。
ウ	することはない。	ウ	はかってもむだである。
エ	することがある。	エ	はかることが望ましい。

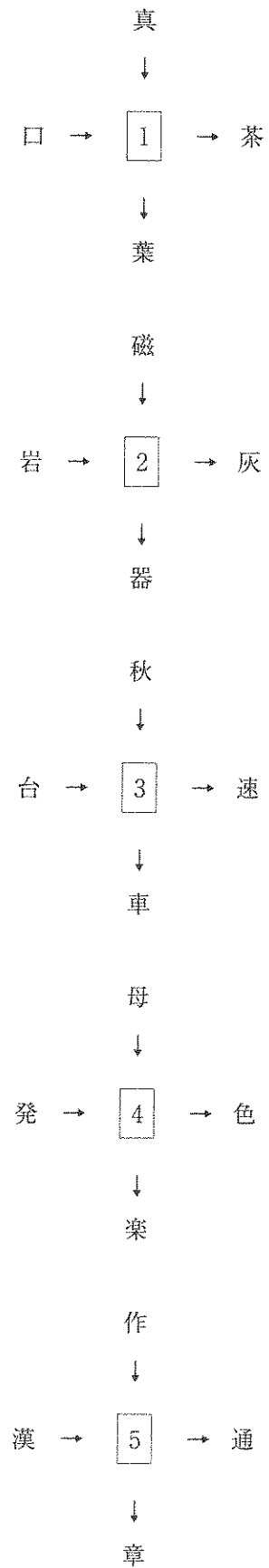
問四 部③「もちろんネットにも良い点があります」とありますが、それはどのようなことですか。説明しなさい。

問五 I に適する語を、漢字一字で答えなさい。

問六 本文の内容として正しいものには○を、間違っているものには×を答えなさい。

- (1) ネットの新聞記事は、全部が横書きの同じパターンで出てくるので、メリハリがなく、記憶に残りにくい。
- (2) 記事を検索する場合、図書館まで行って調べるという手間をかけることによって、印刷された新聞の良さを感ずることができる。
- (3) これからの時代は、印刷された紙の新聞よりも、便利なネットの新聞の記事を大いに活用していくべきである。
- (4) 今はインターネットが普及しているので、わざわざ新聞を取らなくても、ネットで無料の情報が好きなだけ検索できるようになった。

三 矢印の方向に読んで、二字の熟語を作るとき、次の 1 5 に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。



四 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① サイフを落とす。
- ② 部品をセイゾウする。
- ③ 優れたズノウの持ち主。
- ④ ウチュウの探索をする。
- ⑤ 琴をカナでる。

